

東の空に
月を追う

— 余話 —

堀

優志

※当作品は和風ファンタジー『東の空に月を追う』のこぼれ話です。

本編未読でも問題ありません。

蟬ゼんのすけ之助 旅暮らしの薬師くすし。倒れていたハクリを助け、一緒に旅をすることになる。
ハクリ 蟬之助に助けられた少女。やや世間知らず。

東の空に月を追う — 余話 —

昼過ぎに降り出した雨が、ようやく小降りになってきた。服はまだ生乾きで、じっとしてると少しだけ寒い。ハクリは膝を抱えて、ぼんやりと焚き火を眺めていた。

「なあ、蟬ゼんのすけ之助……？」

眠たげな声が、洞窟内に響く。残響はすぐに、雨音にかき消されていった。雨宿りあまつゆのつもりで入った洞窟だったが、すっかり日も暮れてしまった。雨露あめつゆは問題なく凌げるので、今夜はここで野宿ゼんのすけの予定だ。既に食事も終え、あとはもう眠るばかりといった頃合いだった。

「蟬之助ゼんのすけという名、珍しい字を当てているだろうか？ 何か、謂いれがあるのか？」

自分が出した声に、微妙に甘えた色が混じっている気がした。眠いせいかもしれない。だか

らハクリは小さく伸びをして、ゆっくりと目を擦った。蟬之助はまだ眠そうな様子ではない。だから自分も、もう少し起きていたい。

蟬之助はそんなハクリの様子をしばらく眺めていたが、ふいに洞窟の外、その先の闇夜に視線をやった。そして、そうさなあ、と呟いて遠い目をした。

「謂れ、というほどのものでもないが……」

古い記憶を丁寧に掘り起こすように、蟬之助はゆっくりとした口調で続けた。

「これは師匠に貰った名だな。拾われてすぐの頃、俺はびいびいと泣いてばかりの子供だった。それで師匠は、この名前を思いついたんだそうだ」

蟬之助は目を細めて、手にした小枝を焚き火の中に放り入れた。そしてそれきり、黙ってしまふ。

蟬之助の言わんとすることが、上手く掴めない。続きを口にしないのは、考えてみる、ということだろうか。

「……どういう意味だ？」

小首をかき上げながら、ハクリは早々に降参した。すると蟬之助は楽しげに笑い、
「鳴き声ばかりが大きいくせに、中身は空っぽ、ということだな」

種明かしをする蟬之助はどこか少年のようで、そしてとても優しい顔をしていた。この男はこんな顔もするのかと、一瞬、見惚れてしまう。だが、

「……ひどい謂れじゃないか。変えようと思ったことは無いのか？」

言われてみれば、蟬というの大きな声で鳴くくせに、死骸などを見れば中身は空っぽだ。蟬之助の師匠がどんな人物だったか、ハクリは知らない。しかし、拾ったばかりの子供にそんな名前をつけるというのは、どうにも非道いことのように思える。

もし気に入らない名なら、変えてしまえば良いのではないか。だがハクリの問いに、蟬之助は苦笑しながら首を横に振った。そして、

「いや、それは無いな。俺はこの名、けっこう気に入っているんだ。それに……」

蟬之助はそこで一度言葉を区切り、視線を焚き火へとやった。その横顔に、少年の面影はもう無い。

「これは師匠がくれた名だからな。俺が薬師でいるうちは……、変えたくない」

その横顔も声も、そして視線も。師匠のことを語る蟬之助は、とても優しい。だがその優しさの奥に、少しばかりの寂しさが隠れていると、ハクリにはそう感じられた。きつと蟬之助には、隠しているという意識すら無いのだろう。師匠のことを考えてこんな表情をする蟬之助が、ハクリには少し、遠かった。

「蟬之助は、お師匠のことが好きだったのだな……」

思わず、拗ねたような口調で呟いてしまった。拗ねたと思われたくなくて、ぎこちなく微笑んで見せる。

蟬之助は驚いたような顔を見せたあと、すぐに少し困ったように微笑みを返した。そして、ああ、と頷いた。

「叶うならもう一度、この名を呼ばれたいんだが、な……」

寂しげな微笑。

その表情の理由を、ハクリは知らない。それが、たまらなくもどかしい。だから思わず、訊くべきではないことが口を衝いて出た。

「寂しいか？ その……、お師匠と、別れて」

しまった、と思った時には、蟬之助は目を丸くしていた。機嫌を損ねただろうかと不安になる。だが蟬之助はすぐに視線を落とし、思案顔になった。自分が寂しいのかどうか、そんなことをすら、考えることで結論を出すつもりのようなのだ。

蟬之助はそうして少しばかり考えてから、

「そうだな……。今になってみれば、やっぱり寂しかったんだろうな」

何度かゆつくり頷きながら、蟬之助は他人事のように呟いた。

「どういう意味だ？」

遠慮がちに問い返すと、蟬之助はまた、考える顔つきになる。自分の口から出た言葉の意味を確かめるかのように。そして、

「一人のときは、こんなもんだろう、と思っていたからな。その状態に慣れたつもりでもいたし」

蟬之助はそこで言葉を区切って、ちらりと、視線だけをハクリに向けてきた。

「……だからお前と会うまでは、自分が寂しいんだってことにも気付いちやいなかったんだが」

やや早口でそう言い切つて、蟬之助は視線を焚き火へと逸らしてしまつた。そして心なしか、唇を尖らせている。

これは、何だ。

今度はハクリが目を丸くする番だつた。鼓動が少し、速くなる。

今のは、ひよつとして。

「それは……、その、つまり」

蟬之助が言わんとしてに思いを巡らし、思わず口元が緩む。それをちらりと横目で見た蟬之助はますます唇を尖らせて、がりがりと頭を掻いた。

「……もう寝る。今日は疲れてるのかもしれない」

そう言つて、蟬之助は焚き火から少し距離を取り、ハクリに背を向けるようにして寝転んでしまつた。大きなその背が、今は何故か可愛らしく思える。せめて鼓動が鎮まるまではと、ハクリはその背をしばらく眺めていた。やがて、

「なあ、蟬之助」

聞こえるかどうか、そんな声でその名を呼んでみる。答えは無かつた。蟬之助の肩は呼吸に合わせて、規則正しく上下している。

本当にもう、眠ってしまったのだろうか。ハクリがそう思うくらいの間を置いて、

「……何だ？」

背を向けたままの蟬之助が答えた。

寝たふりを決め込んでしまわない、そんなところが誠実だ、と嬉しくなってしまう。だからハクリは少しだけ声を弾ませて、少しだけ声に力を込められた。

「私も。蟬之助が居ないと、寂しくてたまらないぞ」

蟬之助の背中が、固まってしまった。息をするのも忘れてしまったようなその背中が可笑しくて、ハクリは声を漏らさずに笑った。

蟬之助は今、どんな顔をしているだろうか。できれば振り向いてほしいと思ったが、それは我が儘まがらみというものだろう。

ひとしきり笑った後、ハクリは背を向けたままの蟬之助に近付いた。そして手を伸ばせば触れられる程度の距離を開け、並ぶように横になった。

「おやすみ、蟬之助」

「……ああ、おやすみ」

ふて腐れたようなその声は、きつとただの照れ隠しだ。

会話の消えた洞窟に、雨音が満ちる。

間接的とはいえ、滅多に甘えてくれない男に寂しいとまで言わせたのだ。突然の雨も、そういう悪いことばかりではなかった。

終

近況報告：新刊なんざどう考えても間に合わねえ！というわけで、ペーパーでお茶を濁すことにしました。新刊を待ってくださっている方には本当に申し訳ないです。初のペーパーなので勝手にわからず、これはこれで苦労しているのですが（レイアウトとか印刷とか。主に文章以外の部分で）、少しでも楽しんでいただければ嬉しいです。あと初めての方にはちょっとでも興味を持っていただければ幸いです。

次回作について：次回作は今のところ現代の日本を舞台にした学園モノの予定で、ファンタジー要素はゼロです。夜の学校の屋上に忍び込んで星を見たら楽しかろうなあ、という思いで書いてます。ほんと、初雪までに書き上がるといいなあ……。

以下蛇足。今回の『余話』は、『東の空に月を追う』のこぼれ話です。複数の方から同じ質問があったので、一応こんな設定もあるよ、と説明がてら書きました。重大なネタバレがあるわけではないので、『余話』から先に読んでも大丈夫かと。本編のあとがきで「もっとイチャイチャさせたかった」と書いたわけですが、気を抜くとつい肉体的に（も）イチャイチャさせてしまうので、今回は互いに一切触れることのないシーンを切り取りました。でもこいつらはたぶん、私が見ていないところでは存分に肉体的に（も）イチャイチャしてるに違いありません。いいぞ、もっとやれ！というわけで、以上、蛇足でした。

発行者：堀 優志

発行サークル：カナメスタジオ

Mail：mail@canamestudio.com

Web：http://www.canamestudio.com/

発行日：2014年10月12日